# 同志社大学

# 2013 年度　卒業論文

論題：地蔵盆が簡略化される要因について
—4 地域の地蔵盆を比較して—

社会学部社会学科
学籍番号：19091066
氏　名：佐々江　花菜
指導教員：立木　茂雄

(本文の文字数：20708 字)

# 要旨

論題：地蔵盆が簡略化される要因について　―４地域の地蔵盆を比較して―

学籍番号　19091066
氏名　　佐々江　花菜

地蔵盆とは、町内の地蔵を祀りその地域で暮らす子ども達の健やかな成長を願う年中行事である。住民自治と深く関わりながらこれまで伝承され、京都のほとんどの地域で盛大に行われてきた地蔵盆であるが、近年では衰退、または消滅している町内が多いという。実際に筆者の住む地域でも少し前までは丸１日かけて行われていた地蔵盆が、現在では１時間半で終了するなど大きく簡略化されている。どのような経緯で地蔵盆は簡略化されてしまったのか。

本稿では、京都市内の中心部に位置する星池町の４カ所で行なわれている地蔵盆の変遷について、それぞれの町内会長にインタビューを行ない地蔵盆が簡略化される原因について分析した。その結果、子どもが少なくなると運営のための寄付金が集まりにくくなるため、それまでと同じような内容で続けにくくなることがわかった。

また、そのような状況でも定年を過ぎた年配者が会長を務める町内では保守的にそれまでのやり方を継続しようとするが、逆に現役世代が会長を務める町内での地蔵盆は大きく形を変えているということが明らかになった。

キーワード：町内会,地蔵盆,簡略化

# 目次

はじめに……1

第1章　地蔵盆の概要……1

1.1　地蔵盆とは

1.2　地蔵信仰の歴史

第2章　なぜ地蔵盆は簡略化されるのか……4

2.1　仮説1：子どもが減少したという視点

2.2　仮説2：町内会長の年代の影響を受けているという視点

第3章　調査概要……9

3.1　調査方法

3.2　調査対象地域について

第4章　インタビューの結果……14

4.1　星池町北部

4.2　星池町西部

4.3　星池町竹園部

4.4　星池町南部

第5章　調査結果の分析、仮説の検証……22

5.1　各地蔵盆の変化のまとめ

5.2　仮説1についての考察

5.3　仮説2についての考察

おわりに……25

参考文献・参考URL

# はじめに

2011年に内閣府が行なった「社会意識に関する世論調査」によると、日本大震災以降、社会における結びつきが「以前より大切だと思うようになった」という人の割合が79.6%に達するなど、近年、地域のつながりの重要さが再認識されている。しかし、その一方では隣に住む人の顔がわからないなど地域のつながりの希薄化が懸念されている。京都では、「町内」と「元学区(かつての小学校区)」の2つを地域コミュニティの単位として自治活動が行なわれている。町内会での活動としては、地蔵盆、地域の清掃、夜のパトロール、元学区での活動としては、学区民運動会や防災訓練、防犯活動等さまざまなイベントが行なわれ、地域の連携の強化が図られている。

町内会での行事のひとつとして行なわれている地蔵盆は、町内の地蔵を祀りその地域で暮らす子ども達の健やかな成長を願う年中行事である。住民自治と深く関わりながらこれまで伝承され、京都のほとんどの地域で盛大に行われてきた地蔵盆であるが、時代の変化とともに近年では簡略化、または廃止している町内が多いという話をよく耳にする。実際に、筆者の住む地域でもかつては丸1日かけて行われ、幼い頃には毎年楽しみにしていた地蔵盆が、現在では1時間半で終了するなど大きく簡略化されている。

どのような経緯で地蔵盆はこのように形を変えていくのだろうか。地蔵盆に関しての研究は既にいくつも行なわれてきたが、それが簡略化されていく背景に関しては「少子化が進み子どもの数が減少した」「運営の負担が大きい」と軽く触れられているだけで、このことを中心とした研究も見られなかった。この論文では、筆者の住む京都市星池町(ほしがいけちょう)の4カ所で行なわれている地蔵盆の変遷について各町内会の町内会長4人にインタビューを行ない、平成10年度と平成25年度とで比較することで地蔵盆の内容が簡略化される原因について考察する。

# 第1章　地蔵盆の概要

## 1・1 地蔵盆とは何か

地蔵盆とは、各町内でその地域の地蔵を祀り、子どもたちの健やかな成長を祈る年中行事である。「地蔵会(じぞうえ)」や「地蔵祭」とも呼ばれる。京都府を発祥とするが、『日本民俗地図』によると、他にも滋賀県、大阪府と近畿地方を中心として古くから行われており、また、東北地方南部から九州地方北部まで広い地域で行われていることがわかる。我々が普段、〈お地蔵さま〉と親しんで呼んでいるものは、正確には地蔵菩薩というもの

である。もともと地蔵菩薩の縁日が毎月24日であり、それがお盆の期間中である旧暦の7月24日と合わさって「地蔵盆」と名付けられ1年で最も盛大に行われる縁日となった。地蔵盆が開催される時期は一般的に8月24日前後の土・日曜日であるが、一部では7月24日前後に行われる地域も存在する。この違いは新暦の7月24日であるか旧暦の7月24日であるかの違いである。多くの町内では地蔵菩薩を祀っているが、町内によっては天道大日如来を祀っており、その縁日である旧暦7月28日前後の土・日曜日に地蔵盆が行なわれている。昭和の時代までは2日間かけて行われていた地域が多かったが、近年では規模が縮小されて8月20日過ぎの土曜日、日曜日のどちらか1日で行なわれることが多い。

石川純一郎によると、祭りの費用は、①町内会費からの補助金、②住民からの寄付金、③お供えのいずれか、または複数の組み合わせによって調達される。会場については、大きく分けると屋内、屋外の両方があり、各所まちまちとなっている。屋内の場合は寺、集会所、民家となっている。屋外の場合は地蔵の祭祀場所の前の路地か駐車場をあて、ここにテントを張り、敷物を敷く（石川　1995）。

また、内容に関しては各町内によって様々であるが、基本的には住職による読経、数珠回し(2～3メートルの大きな数珠を囲んで座り、読経にあわせて順々に回すというもの)、法話といった〈仏事系〉、ビンゴ、福引き、輪投げといった〈遊び系〉、お菓子やジュースの配布やお供えのお下がりといった〈配布系〉が行なわれることは共通している。

> この日、各町内に祀られているお地蔵さんが、祠から出され、身体を洗い、顔に化粧が施される。新しい手製の前掛けなど取り替えられたりもする。そして、鏡餅や菓子(あとで町内の子供たちにお下がりとして分けられる)などが供えられ、地域によっては、大きな数珠を繰り回す百万遍数珠繰りが行なわれるが、夜店などの娯楽的な要素を取り入れたところが多い。子どもたちはこの行事を夏休み最後の楽しみとしているのである。(森谷尅,中田昭 2000:114)

このように、地蔵盆というと子どものための行事というイメージが強い。しかし、近年では地蔵盆の持つさまざまな機能が注目されている。子どもの文化研究所発行の『子どもの文化』によると、普段は滅多に顔を合わせることや会話をする機会のない住民たちが地蔵盆をきっかけにコミュニケーションをとるなど、大人同士の親睦を深める場としての役割が期待されている。地蔵盆は人々が集う地域社会の要である行事であり地域の人たちの絆を強化する地縁社会の再生に一つの示唆を与えているのである(子どもの文化研究所 2000)。

また、『京都新聞』によると「地蔵盆は男女共同参画実現の好例」であるとして、地域社会における地蔵盆の新たな機能を示している(2004)。さらに、大津市を拠点して活動する「〇二〇三(おおつおうみ)の会」が大津市内の32の町内会を対象に、地蔵盆での男女の

役割や地蔵の管理者などについて聞き取り調査を行なった結果、地蔵盆が伝統行事としては男女共同参画が実現している貴重な例であるという報告もされている。このように、地蔵盆は様々な形で地域に貢献しているのである。

### 1.2 地蔵信仰の歴史

京都では昔から地蔵信仰が盛んであり、まちのいたるところに小さな地蔵の祠が祀られている。このような、地蔵に対する信仰はいつ頃から始まったのだろうか。

年中行事・記念日事典によると地蔵菩薩は、「六道(人間が善悪の業によって生死をくり返す世界。地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道)の一切衆生を教化・救済するという菩薩。日本では平安時代から信仰されるようになり、貴族信仰がしだいに民間でも広まったもの。」(学研辞典編集部 2004:182)である。

このように、平安時代から信仰を集めてきた地蔵であるが、地蔵盆の起源については必ずしも明らかとなっていない。しかし、諸説あるうちのひとつとして中世以降に盛んに行なわれた「六地蔵参り」が起源であると言われている。六地蔵参りとは地蔵の縁日とされる旧暦の7月23日・24日に伏見（大善寺）、鳥羽（浄禅寺）、桂（地蔵寺）、常盤（源光寺）、鞍馬口（上善寺）、山科（徳林寺）の6カ所の地蔵を巡拝する行事である。これらの6カ所は京都にある6カ所の街道口（奈良街道、西国街道、丹波・山陰街道、周山街道、鞍馬街道、東海道）にあたり、そこに地蔵を祀ることで悪霊や悪疫の侵入を防いでいたのである。巡拝者たちはそれぞれの寺で〈幡（はた）〉を求める。一巡すれば6枚となり、この幡を家の門口で吊るしておくと厄除けの護符になると信じられている。

真下美弥子は、この考えは京都の町のあちらこちらに祀られている地蔵の祠にも通じていると述べている。

> 地蔵たちの祠はほとんどの場合、町の出入り口や岐路、もしくは角や突き当たり等に置かれる。これらの地点は防犯の要所であり、そこに地蔵を祀るのは住民に防犯についての喚起を促すという、知恵にもとづいたものであった。近世の京の町の暮らしは火災や盗難、飢饉や食糧難、疫病の流行等が多く、しかもこれといった保障もないため、不安に満ちていた。肩を寄せ合い助け合う暮らしの中では、生活基盤を同じくする地縁こそが命綱だった。古い町内に祀られた地蔵の祠の石柱や幕にはしばしば、「町内安全」の文字が刻まれる。そこからは何よりもこれが地蔵に託された切実な願いであったことが伝わってくるのである。(真下 2012)

現在行なわれているような「子どもの守り神」としての行事が行なわれるようになるのは江戸時代に入ってからのことである。延宝8（1680）年の上方随筆「難波鑑」には、「(七月)地蔵祭　同廿4日。けふハ地蔵の御えん日にて。町々の辻に。わらバへとも。供物灯明

をかゝげてまつる也」という記述があり、現在の地蔵盆につながる行事が、すでに江戸時代初期に大阪で成立していたことが伺える。

また、貞享2（1685）年に黒川道祐が京都の年中行事について記録した「目次紀事」には「七月廿四日　洛下童児地蔵祭　洛下童児、各供香華於街衢之石地蔵而祭之。蓋道饗祭之遺風乎」とあり、大阪同様に17世紀後半の京都でも童児が街衢の石地蔵を祀る行事が成立していたことが明らかになっている。

さらに、文化12（1815）年に書かれた「若狭国小湊領風俗問状答」には「七月廿四日地蔵祭り、辻々の石地蔵迄（中略）いろいろの供物、子供うち集まり頻りに鉦をならし南無地蔵大菩薩と唱ふ」という記述があり、この時点で現在の地蔵盆の姿にかなり近づいていることがわかる。

その後、明治時代初期に政府の出した神仏分離令による廃物毀釈の影響や第二次世界大戦中の物資不足影響を受けて中断を余儀なくされたものの、地蔵たちを土中や川中から掘り起こして再び町内に祀るなど人々の熱意で復活を遂げ、戦後になり遂に子どものためにお菓子やヨーヨーつりや輪投げ等の様々な遊びが用意された、現在行なわれている地蔵盆の姿へと完成されたのである。伏見のまちづくりをかんがえる研究会子どもの生活空間研究グループの報告よると、「地蔵盆」という呼び名はこのような中断と復活のなかで生まれ、「地蔵祭り」から「地蔵盆」へと変化したものである。（伏見のまちづくりをかんがえる研究会 1987）

以上の事から、地蔵は「町内安全の守り神」であるとともに、「子どもの守り神」という存在でもあることがわかる。これまで多くの人々に支えられて、廃物毀釈にも戦争にも負けず受け継がれてきた地蔵盆であるが、近年では2日間から1日へ、1日から半日へと簡略される、あるいは廃止されている地域が多いという話をよく耳にする。

2008年に滝沢ひろみ、福野奈都子、井上えり子が京都市の西陣地区198町を対象に行なった「地蔵盆空間の研究」によると地蔵盆の日数は40年前には2日以上行なう町内が73%であったが2008年には43%へと減少していたという結果がでている。どのような経緯で地蔵盆は簡略化されてしまったのだろうか。簡略化される町内にはどのような特徴があるのか。第2章では地蔵盆が簡略される原因について、2つの仮説をたてて考えてみる。

## 第2章　なぜ地蔵盆は簡略化されたのか

### 2.1 仮説1：子どもが減少したという視点

地蔵盆の内容が簡略化された原因として第一に考えられるのが、子どもの数の減少である。第1章で地蔵信仰の歴史をみて、地蔵には「町内の安心安全の守り神」や「子どもの

守り神」という意味が込められているということを確認したが、住民にとって地蔵盆というとやはり「子どものための行事である」という意識が強い。

**表１　町内にとっての地蔵盆の位置付け**

| | 待賢 | | 城巽 | | 有隣 | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 町内 | % | 町内 | % | 町内 | % | 町内 | % |
| 子どもの安全の祈願 | 18 | 75.0 | 13 | 65.0 | 19 | 79.2 | 50 | 73.5 |
| 先祖の供養 | 10 | 41.7 | 10 | 50.0 | 14 | 58.3 | 34 | 50.0 |
| 商売繁盛の祈願 | 3 | 12.5 | 0 | 0.0 | 1 | 4.2 | 4 | 5.9 |
| 大人の集まり | 4 | 16.7 | 2 | 10.0 | 6 | 25.0 | 12 | 17.6 |
| 地域住民の親睦 | 20 | 83.3 | 18 | 90.0 | 21 | 87.5 | 59 | 86.8 |
| 家族・親戚が集まる機会 | 1 | 4.2 | 1 | 5.0 | 1 | 4.2 | 3 | 4.4 |
| 町内の伝統行事 | 19 | 79.2 | 15 | 75.0 | 19 | 79.2 | 53 | 77.9 |
| 地蔵があるので続けてきた行事 | 11 | 45.8 | 12 | 60.0 | 14 | 58.3 | 37 | 54.4 |
| 世話役が回って来るので続けてきた | 5 | 20.8 | 5 | 25.0 | 6 | 25.0 | 16 | 23.5 |

**出所：前田正弘、森重幸子（2012）**

平成24年に前田昌弘、森重幸子が京都市の都心部に位置する4つの学区を対象に行なった「地蔵盆の運営実態と地域のレジリエンス向上に果たす役割に関する研究」の結果からも約7割の町内が地蔵盆を子どもの安全の祈願を目的のひとつとしていることがわかる。子どものために行なわれる地蔵盆が、子どもの減少によって参加者がいなくなることで影響を受けていることはまず間違いないであろう。過去に行なわれた地蔵盆についての研究での「地蔵盆が衰退・簡略化されている現代の各町内では、その原因として子ども数の減少と負担の大きさをあげる。(真下美弥子、真下厚、深澤光佐子　2012)」、「地域の自治力の低下や子どもの減少などを背景として行事の簡略化や廃止といった状況が近年はみられ、存続が危ぶまれている。(前田、森重　2012)」、「上福田で今でも地蔵盆が伝えられてきえいるのには、減ってきているとはいえ、一定数の子どもがおるからであろう。(上野智史　2004)」といった記述からも、子どもの数が地蔵盆の運営に大きく影響していることが伺える。以上の事から、地蔵盆の簡略化がすすむ原因のひとつとして子どもの数の減少が挙げられると考えられる。

### 2.2 仮説2：町内会長の年代の影響を受けているという視点

地蔵盆が簡略化される原因についての第2の仮説として町内会長の年代の影響を受けているというということが考えられる。住民たちは、地域のつながりについてどのように感じているのだろうか。また、自分の住む地域に対して強い関心を持つ人、また運営に携わる人はどのような人なのだろうか。

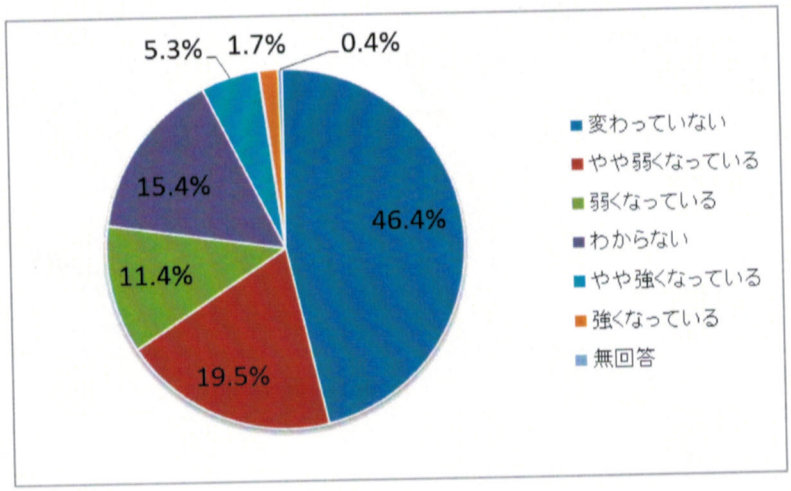


**図 1　　10 年前と比較した地域のつながりの強さ**

**出所：内閣府「国民生活白書」(2007) をもとに作成**

平成 19 年に内閣府が作成した「国民生活白書」によると、10 年前と比較して自分の住む地域におけるつながりの強さがどのように変化したか調査した結果、「変わっていない」と回答した人の割合が 46.4%で最も多かったものの、次いで「弱くなっている」「やや弱くなっている」と回答した人が合わせて 30．9%にも上った。その一方で、「強くなっている」「やや強くなっている」と回答した人はわずか 7%にとどまった。この結果から、国民は時代の変化とともに地域のつながりの希薄化を実感していることがわかる。

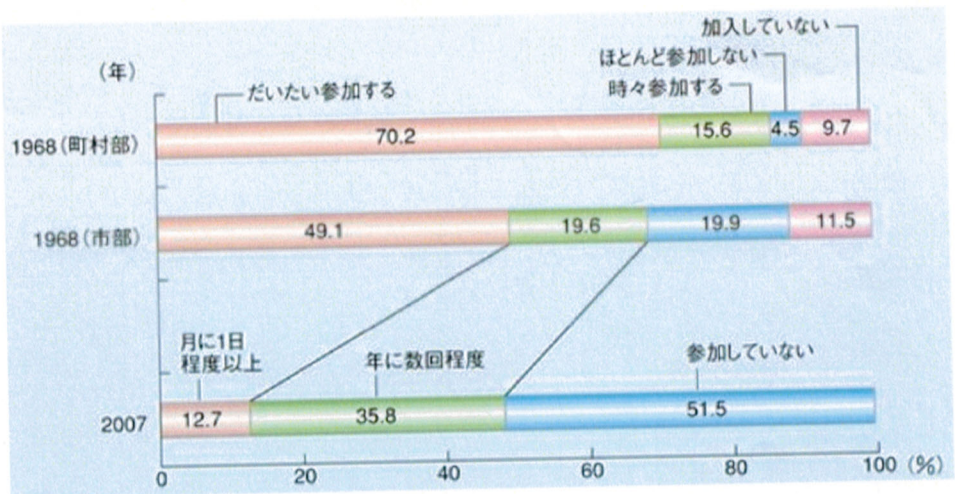


**図 2　町内会・自治会への参加頻度**

**出所：内閣府「国民生活白書」(2007)**

また、町内会・自治会への参加頻度に関する質問では、1968 年には「だいたい参加する」と回答した人が町村部では 70.2%、市部では 49.1%であったが、2007 年においては月に

1日程度以上の頻度で参加していると回答した人は12.7%と大きく減少している。この結果について、内閣府は

「これら別の時期に行われた二つの調査は、質問の選択肢などが異なることから、これらの割合を直接比較することはできない。しかしながら、68年当時の町内会・自治会の活動としては、「募金（の協力）」、「清掃（美化）」、「消毒」、「街灯管理」といった日常的なものが多く、このような活動は頻繁に行われたことが推測される。すると、68年の「だいたい参加する」は、2007年の「月1日程度以上」と比べて、参加頻度は同等あるいはそれ以上であったと見ることが自然であろう。こうしたことに鑑みれば、町内会・自治会への参加頻度は、68年から2007年までの間に低下していると言える。」（内閣府2007）

と分析している。

次に、平成24年に京都市が行なった、「自治会・町内会アンケート報告書」によると、町内の代表者(町内会長)を務める人物の性別は、男性が79.9%、女性が18.7%と男性が約8割を占めていることがわかった。年齢に関しては、60代が38.0%で最も多く、次いで70代の23.6%、50代の18. 0%となっていた。会長在任年数は1年未満の69.3%が最も多く、次いで1年以上2年未満の13.1%となっている。会長の選出方法は輪番制の43.2%が最も多く、次いで役員による互選22.5%、総会での選挙15.5%となっていた。

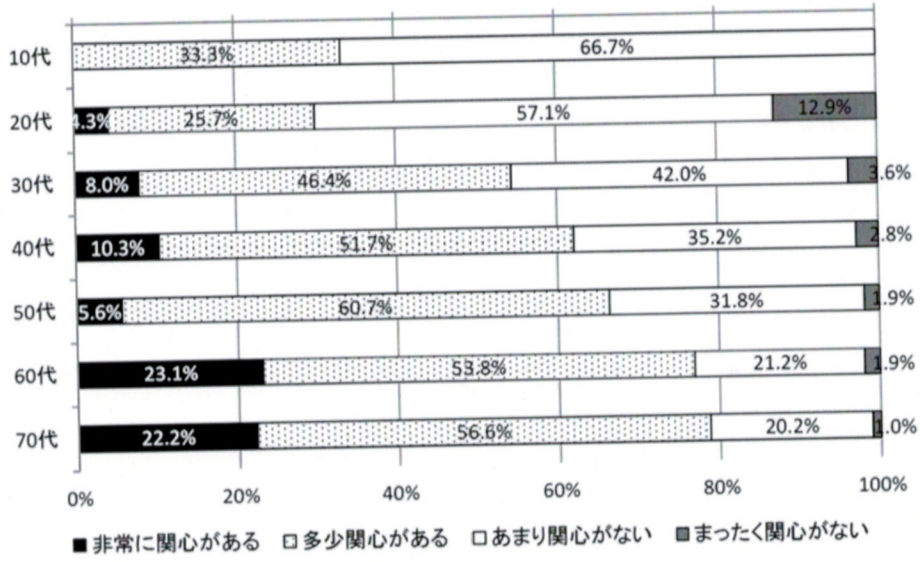


図3　年齢別に見た町政への関心

出所：幸田町(2012)

次に、平成24年に愛知県の幸田町が町民1500名を対象に行なった住民意識調査の結果によると、町政について「関心がある」と回答した人の割合は70代が最も多く78.8%となっており、次いで60代の76.9%、50代の66.3%と年代が高くなるほど町政への関心が高いことがわかった。また、町政に対して「非常に関心がある」と回答した人の割合は70代では22.2%、60代では23.1%と非常に高かったのに対して、50代では5.6%、40代では10.3%、30代では8.0%と60代以上と50代以下の間に大きく意識の差があることが明らかになった。

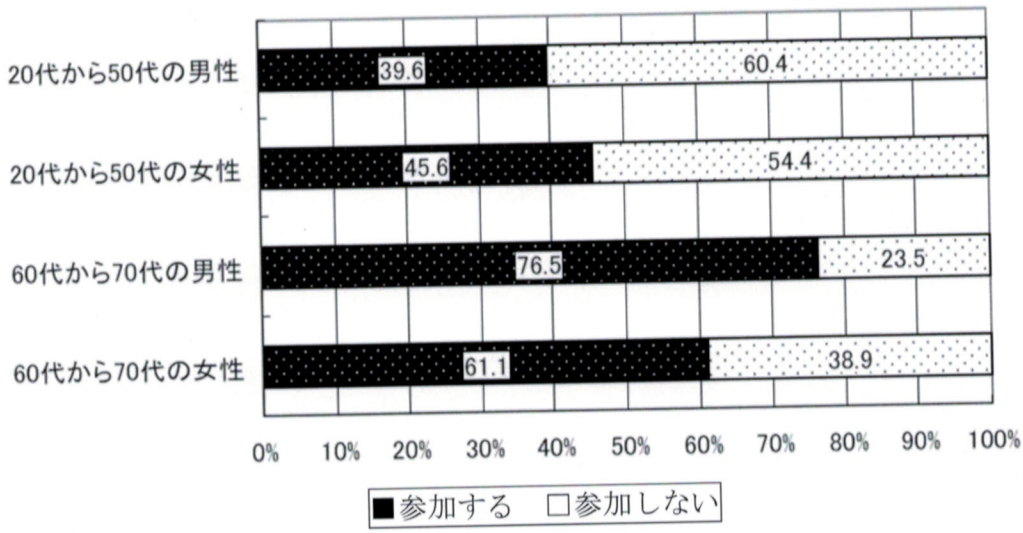


**図4　年代別にみた町会への参加率**

**出所：金沢市・金沢大学文学部社会学研究室(2009)**

次に、平成19年に金沢市と金沢大学文学部社会学研究室が行なった「市民のコミュニティに関する意識・行動調査」の結果からは、町会の総会への参加の頻度は20代で参加すると答えた人は1割、30代から50代では5割、60代から70代では7割と年齢が高い人ほどよく参加することがわかった。それに加えて、20代から50代では男性が4割、女性が5割と男性より女性の方がよく参加しているのに対して、60代と70代では男性8割、女性6割と、逆転して男性のほうがよく参加していることが明らかになった。金沢大学文学部社会学研究室は、この結果について「ひとつは以前のほうが町会参加への規範が強く働いているため、高齢者ほど町会によく参加すること。もうひとつは男性にとって町会は仕事と両立することが難しいけれども、定年後には町会により積極的に参加する傾向があることです。町会は定年後の方に新たな生きがいを提供している側面があるといえます。」(2007) と述べている。

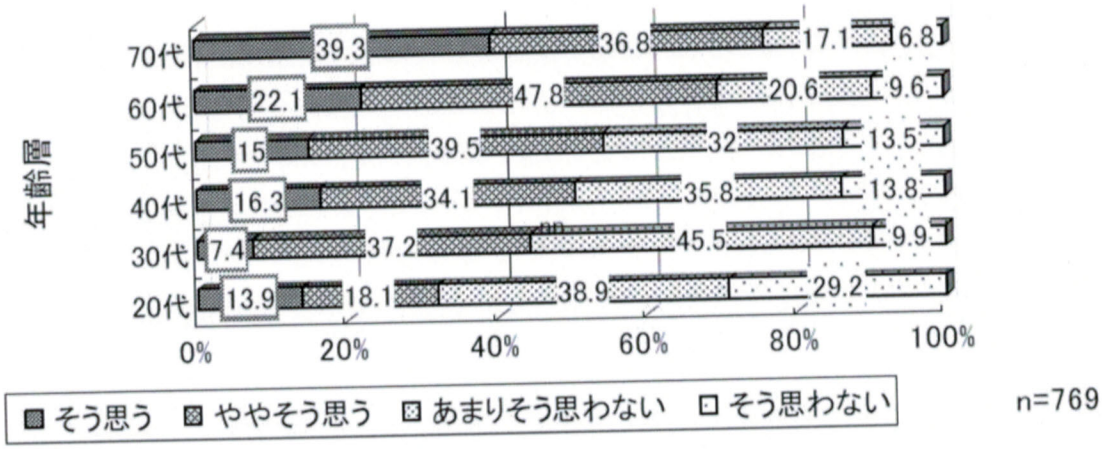


図 5　年代別にみた町会行事への参加義務の意識

出所：金沢市・金沢大学文学部社会学研究室(2009)

さらに、「町会の行事には、できるかぎり全員が参加すべきだ」という質問に対して「そう思う」と答えたのは70代では39.3%、60代では22.1%であったの対して50代では15%、40代は16.3%であった。ここでも町内会への参加に関して、60代と50代の意識の差がみられた。

これらの結果をまとめると、仕事をしている若いうちは仕事と町内会の仕事を両立することが難しく、それゆえ町政への関心も薄くなり地域行事への参加義務意識も薄い。しかし、定年を迎えて自由な時間が増える頃から地域行事へ参加する頻度が増えて町政への関心も強くなるということになる。以上のことから、地蔵盆の運営に関しても、町内会について関心の強い60代以上が町内会長の役を担う地域ではそれまで受け継がれてきた内容を大切にしてそれまでのやり方を継続しようとする。しかし、反対に町内会への関心も弱く町会行事への参加義務も強く感じていない50代以下の人が町内会長を務める地域では、地蔵盆は形を変えている(簡略化されている)のではないかという仮説が立てられる。

## 第3章　調査概要

### 3.1 調査方法

第2章で提示した2つの仮説があてはまるか否かを検証するため、京都府京都市中京区にある星池町の北部・南部・西部・竹園部の計4カ所で行なわれた地蔵盆を平成10年度と平成25年度とで比較した。まず国勢調査の結果から星池町の世帯の変化を確認し、聞き取り調査は2013年11月から12月にかけてそれぞれの地域の町内会長4名を対象に行なった。この4名はいずれも古くから星池町で暮らしており、町内会および地蔵盆の運営について詳しい居住者である。調査の内容は、地蔵盆における行事の内容、開催場所、参

加者の数や構成、地蔵の管理、運営の担当者、運営の資金などが平成 10 年から平成 25 年の間にどのように変化したかについてである。調査対象者の属性は以下の表 2 のとおりである。

表 2　インタビュー対象者一覧

| | 性別 | 年齢 | インタビュー実施日 | インタビュー時間 |
|---|---|---|---|---|
| 北部町内会長 | 男性 | 50 代 | 11 月 9 日・12 月 2 日 | 約1時間 |
| 南部町内会長 | 男性 | 60 代 | 12 月 3 日 | 約 30 分 |
| 西部町内会長 | 男性 | 60 代 | 11 月 11 日・12 月 3 日 | 約 40 分 |
| 竹園部町内会長 | 男性 | 70 代 | 11 月 11 日・12 月 3 日 | 約 50 分 |

### 3.2 調査対象地域について

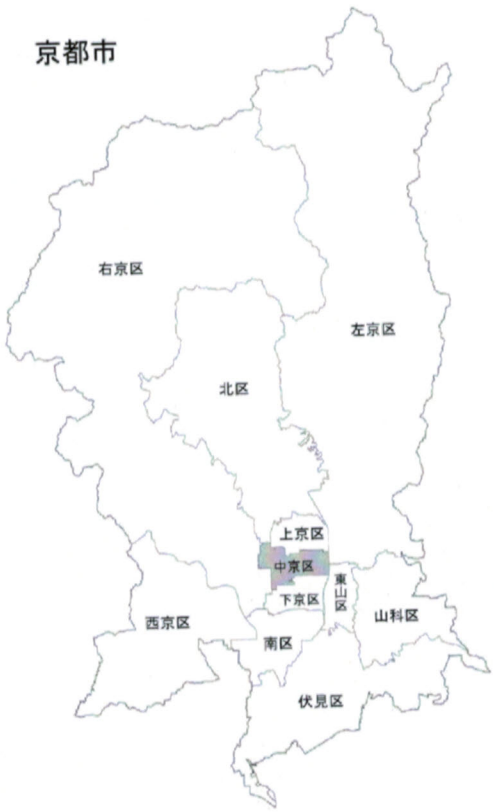


図 6　京都府の地図

出所：テクノコ(2013)をもとに作成

本調査の対象は星池町であるが、まず、中京区の概要を述べ、次に星池町の概要を説明する。図 1 は、星池町がある京都市中京区の位置を表した地図である。中京区は京都府を

構成する 11 個の区のうちのひとつで、京都市のほぼ中央部に位置している。昭和 4 年の 4 月に上京区・下京区から分区して新設された区であり、中京区役所によると、面積は 7.38 平方 km で 2013 年 9 月 1 日時点での人口は 107511 人、世帯数は 57730 世帯である。以下は下京区役所のホームページからの引用である。

御池通，烏丸通，河原町通，四条通沿いには，官公庁，政治・経済団体，金融機関，商店などが集中しており，観光・娯楽・ショッピングなどで賑わうとともに，京都市の産業・経済活動の中心となっている。一方，堀川通沿いには，平成 6 年 12 月に世界文化遺産に登録され，平成 15 年には築城 400 年を迎えた二条城が建ち，まちのシンボルとなっている。　また，一歩大通りを外れると昔京都の中心であったといわれる「へそ石」のある六角堂をはじめ，重要文化財になっている京都文化博物館（別館）など明治時代のレンガ造り建築が残るレトロな町並みを現代に生かした三条通，問屋街の室町通，家具の夷川通，寺院の建ち並ぶ裏寺町通，寺町通と神泉苑通，かつては高瀬川による物流の中心を担い，今は市内きっての飲食街の木屋町，祇園祭でにぎわう鉾町，そして京の台所として知られる錦小路通など，今に栄える京の町をうかがうことができ，社寺を中心とした観光地とは一味違った，町衆の息吹あふれる京の魅力を感じさせてくれる町である。(中京区役所　2012)

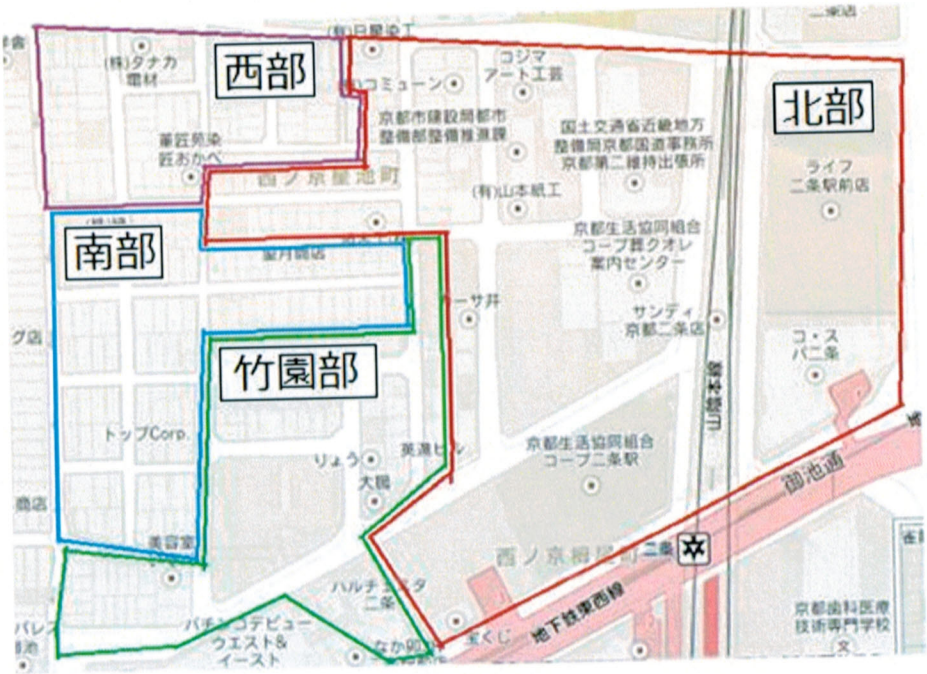


図 7　星池町の地図

出所：google map をもとに作成

星池町は、中京区の西部、世界文化遺産二条城の北西に位置している。南北に走る六軒町通りをはさんで、北を二条通り、南を御池通り、西を七本松通り、東を千本通りに挟まれている。図7は、北部、南部、西部、竹園部で色分けした星池町の地図である。赤色が北部、緑色が南部、紫色が西部、青色が竹園部の位置をあらわしている。

星池町を含む、JR山陰線二条駅周辺では、平成3年から平成21年にかけて、「交流と創造のまち」を基本テーマに掲げた土地区画整理事業が行なわれた。JR山陰本線の連続立体交差に伴い廃止された二条駅併設の貨物ヤードを有効利用し，周辺地域を含めた約13.2haの区域において生活道路や公園・駅前交通広場などの公共施設の整備が行なわれた。1996年のJR二条駅の新駅舎完成から始まり、1997年には市営地下鉄東西線の開通、2005年には映画館、アミューズメント施設、飲食店、物販店を備えた複合施設BiVi二条が完成。2006年にはスポーツジムのコスパ二条や立命館大学朱雀キャンパス、2011年には佛教大学二条キャンパス、そして2011年のライフ二条店の開店等、他にも数えきれないほどの建造物が建てられ、不便で静かな町から、夜になっても人通りの多い賑わいのある町と変貌を遂げた。一体的な都市基盤整備が進むと同時に交通結節機能の向上したことで、新たに越してくる住民も増加している地域である。

### 3.3 国勢調査の結果

ここでは、平成7年と平成22年に行なわれた国勢調査の結果を使用して星池町の変化をまとめる。

表3　星池町の世帯数と人員数

（単位：世帯数）

| | 平成7年 | 平成22年 |
|---|---|---|
| 世帯数 | 243 | 299 |
| 1人暮らし | 48 | 108 |
| 2人暮らし | 64 | 75 |
| 3人暮らし | 52 | 58 |
| 4人暮らし | 48 | 42 |
| 5人以上 | 31 | 16 |
| 世帯当り人員 | 2.85 | 2.29 |

表4　星池町の住宅の建て方

（単位：世帯数）

| | 平成7年 | 平成22年 |
|---|---|---|
| 一戸建 | 169 | 204 |
| 長屋建 | 63 | 25 |
| 共同住宅 | 11 | 63 |

出所：京都市情報館「国勢調査」(1995, 2010)より作成

表3は星池町の世帯数と1世帯当たりの人員数をあらわしている。世帯数は平成7年では243軒、平成22年は299軒と56軒増加している。住宅の建て方をあらわした表4を見ると、長屋建に住む世帯数が63から25へと減少している一方で一戸建てに住む世帯数は169から204へと35軒増加、共同住宅は11軒から63軒へと52軒増加している。

星池町では平成7年から平成22年までの間に室数12部屋と36部屋のマンションが2棟建築されているので、表2で見た世帯数の増加は、これらのマンション住民の増加によるものが大きいと考えられる。

次に、1世帯あたりの人員数に関しては、1人暮らしの世帯が平成7年は243であったが平成22年では299と大きく増加している。また、2人暮らし・3人暮らしに関しても64軒が75軒、52軒が58軒と増加していた。一方で4人暮らしの数は48件から42軒、5人以上の世帯は31軒から16軒と大きく減少しており、1世帯当たりの人員は平成7年の2.85人から平成22年の2.29人と減少していた。

表5　星池町の年齢別人口

（単位：人数）

| | 平成7年 | 平成22年 |
|---|---|---|
| 総人口 | 692 | 686 |
| 0～9歳 | 41 | 49 |
| 10～19歳 | 89 | 49 |
| 20～29歳 | 80 | 66 |
| 30～39歳 | 54 | 100 |
| 40～49歳 | 122 | 63 |
| 50～59歳 | 109 | 73 |
| 60～69歳 | 76 | 125 |
| 70歳以上 | 121 | 123 |

表6　星池町住民の従業上地位

（単位：人数）

| | 平成7年 | 平成22年 |
|---|---|---|
| 雇用者 | 250 | 267 |
| 自営業主 | 64 | 40 |
| 家族従業者 | 22 | 13 |

出所：京都市情報館「国勢調査」(1995, 2010)より作成

表5は、星池町の人口を年齢別にあらわしたものである。総人口は平成7年では692人、平成22年は686人とわずかに減少していた。0歳から9歳までの子どもの数は平成7年では41人から平成22年は49人へとわずかながら増加した一方で、10歳から19歳までのど数は平成7年の89人から49人へと大きく減少していた。20代の人数は80人から66人へと減少、30代は54人から100人へと大きく増加、40代と50代はそれぞれ122人が63人、109人が73人へと減少していた。反対に、60代と70歳以上の数はそれぞれ76人から125人、121人から123人と増加した。

この結果から0歳から19歳までの未成年の数と、60歳以上の年配者が全世帯に占める割合を計算すると、平成7年から平成22年の15年間のうちに、20歳以下は18. 8%から14.3%に減少、60歳以上は28.5%から36.2%へと増加しており、少子高齢化がすすんでいることがわかった。

最後に、表6は、星池町に住む住民の従業上の地位をあらわしたものである。雇用者が平成7年では250人であったが、平成22年では267人へ増加した一方で、自営業主の数

は64人から40人へ、家族従事者の数は22人から13人へと減少しており、外に働きにでる人が増加していることが明らかになった。

# 第4章　インタビューの結果

## 4.1 星池町北部

(1) 地域の概要

図7で示したように、北部は星池町の東側に位置している。今回調査する4つの地域の中で、最も広い敷地を持つ地域である。平成3年から平成21年にかけて行われた土地区画整理事業により、46軒のうちの約半分の家は建て替えられ、新しい住宅が多い。一時期世帯数が減少したが、最近では新しく越してきた住民も増えている町内である。

表7　星池町北部の地蔵盆

| | 北部<br>町内会長(50代) | |
|---|---|---|
| | 平成10年 | 平成25年 |
| 日程 | お盆が終わった次の日曜日 | お盆が終わった次の日曜日 |
| 場所 | 道路にテントを立てる | 町内会役員の敷地内(ガレージ等) |
| 運営の資金 | 地蔵盆の為に集められた寄付(約20万円) | 町内会費(約6万円) |
| 地蔵の管理 | 道端に祀られている | お寺に預けている |
| 運営する人 | 町内会役員 | 町内会役員 |
| 参加する層 | 子ども | 年配者 |
| 世帯数 | 46軒 | 46軒 |
| 子どもの数 | 約20人 | 12人。参加したのは8人 |
| 子どもの役割 | 地蔵盆当日に鉦を鳴らしてまわる | 特になし |
| マンション | 1棟。町内会には入っていない | 1棟。町内会には入っていない |
| 町内会長 | 過去25年の間に町内会長を務めていない人から選ぶ。仕事をしながら町内会長の仕事をする場合がほとんど。 | |
| 内容 | 9:30～16:30<br>お寺(法話・読経・数珠回し)<br>輪投げ<br>ビンゴ<br>スーパーボールすくい<br>福引き<br>子供用菓子<br>家庭用菓子<br>子供用図書カード<br>ハンバーガー等 | 10:30～11:30<br>お寺(法話・読経・数珠回し)<br>終了後、家庭用菓子・子供用菓子・子ども用図書カード配布 |
| これから先 | 最低限、この状況を維持する | |

(2) 町内会組織と地蔵盆の運営

現在、町内には46軒が居住している。地蔵盆の主役となる中学生までの子どもの数は12人である。マンションが1棟存在するが、町内会には加入していない。町内会組織としては5組に分かれている。地蔵盆の運営は、町内会長、副会長、会計の3役と各組から選出される組長5人が担っている。町内会長は、過去25年までさかのぼり、それまでに務めたことのない人のなかから前年度の町内会長が選出する。町内会長の年齢は、平成25年度と24年度では50代、平成23年度では70代の人が務めている。それ以前も50代の人が務めることが最も多く、次いで60代が多い。よって、仕事をしながら町内会の仕事も務める場合がほとんどである。地蔵盆の費用に関しては、町内会費で賄っている。平成25年度では、町内会費から約6万円を使用して地蔵盆が行なわれた。平成18年までは地蔵盆の為に各戸から集められた寄付金で賄われていたが、平成16年あたりから子どもの数が激減して4～5人になったことをきっかけに、数名の子どもの為に子どものいない多くの家庭からわざわざ寄付金を集めづらいという会長と役員たちの考えで町内会費に切り替えられた。また、地蔵の管理に関しては、10年ほど前までは北部に住む住民の敷地に祀られていたが、現在では地蔵盆で使用する時以外はお寺に預けられている。

平成10年も現在と変わらず家の数46軒であった。しかし、子どもの数は約20人と現在の2倍ちかくの人数であった。現在も北部にある1棟のマンションがこの年に建てられたが、現在と同じく町内会には加入していない。地蔵盆の運営に関しても、それぞれの組長と町内会長、副会長、会計の3役が担っていた。地蔵盆の費用は、当時はまだ子どもの数が多かった為、町内会費ではなく住民に寄付金を募って運営していた。この頃の寄付金は20万円ほど集まっていた。これは現在の3倍以上の金額である。地蔵の管理に関しては、北部に住む住民の家の敷地内を借りて祀られていた。

(3) 地蔵盆の内容

平成25年度の地蔵盆は8月18日、日曜日に開催された。日程については毎年お盆が終わった次の日曜日に開催されるのが毎年の恒例である。

当日は、10時30分に地蔵盆の会場である町内会長宅のガレージに集合し、そこでお寺の住職による10分程度の読経と数珠回しが行なわれる。その後、住職による10分程度の法話がある。法話の内容は、近年子どもの数が減って地蔵盆がなくなる町内が多く、星池町北部も子どもより高齢者の方が多い「シルバー地蔵」であるが、町内に住む人が協力して準備することは素晴らしいことで、これからも人と人との繋がりを大切にして是非続けて行って欲しい。という大人たちに向けた内容であった。地蔵盆としてのプログラムは以上で終了、終了後は30分ほど住民同士の交流時間が設けられ、お昼前に解散となった。その後、各家庭にお供えのお下がりと家庭用菓子・子供用菓子(幼児～小学生)・図書カード(幼児～中学生)が配布されるという流れである。

当日、北部に住む子どもはほぼ全員参加していたものの、もともとの人数が少ないため、主な参加者は年配者となっている。今後の地蔵盆については、現時点で最低限の内容しか行なっていないため、今後もこの状況は維持していきたいという事であった。現在はこのように非常に簡略化された内容の地蔵盆であるが、平成10年の時点では、以下のように充実した内容の地蔵盆が行なわれていたという。

現在と違い、平成10年度では地蔵盆は朝9時頃からから夕方まで行なわれていた。内容は、朝にお寺の住職が来て読経、数珠回し、法話があるということ、子供のおやつ、中学生用の図書券が配られる点は現在と変わらない。しかし、現在では一度にすべての配布物をまとめて渡しているが、この頃はあらかじめプログラムで決められた時間ごとに配布物を受け取っていた。さらに、平成10年では家庭用品の配布、幼児から中学生までの子どもにはハンバーガーとビンゴゲーム、輪投げ、スーパーボールすくい、福引き等の遊びがたくさん用意されており子どもたちが毎年楽しみにしている行事であった。また、現在では地蔵盆の運営は100%大人が行なっているが、当時は地蔵盆のプログラムの時間ごとに子供たちが時間を知らせる鉦を鳴らして町内をまわっていたが。これも、子どもが激減した頃になくなっている。

### 4.2 星池町西部の地蔵盆

(1) 地域の概要

図7で示したように、西部は星池町の北東に位置している。昭和の頃は商店街としてたくさんの店が営業していたが、現在営業している店は3軒のみとなっている。区画整理事業のエリア内ではないため、新しく建てられた住宅は少なく昔ながらの街並みの町内である。

表 8　星池町西部の地蔵盆

| | 西部<br>町内会長(60代)<br>平成10年 | 平成25年 |
|---|---|---|
| 日程 | 8月の終わりの日曜日。役員が集まって決める | 8月の終わりの日曜日。役員が集まって決める |
| 場所 | 道路にテントを立てる | 道路にテントをたてる |
| 運営の資金 | 地蔵盆の為に集めた寄付(約20万円) | 地蔵盆の為に集めた寄付(約15万円) |
| 地蔵の管理 | 倉庫に入れている | テントと一緒に倉庫に入れている |
| 運営する人 | 町内会役員 | 町内会役員 |
| 参加する層 | 子ども | 子どもとその親 |
| 世帯数 | 41軒 | 44軒 |
| 子どもの数 | 約20人 | 約10人。参加したのはさらに少ない |
| 子どもの役割 | 当日飾る行燈の絵を描く。鉦を鳴らしてまわる | 当日飾る行燈の絵を描く。鉦を鳴らしてまわる |
| マンション | 2棟。町内会には入っていない | 2棟。町内会には入っていない |
| 町内会長 | 5組のうちの組長の中から選挙で町内会長を選ぶ。1度町内会長を務めたら、5年間は町内会長になることはない。過去の町内会長は、まれに40代50代の人が務めることもあるが、基本的に60代以上の年配者が務めている。 | |
| 内容 | 朝から夜まで<br>お寺(読経・数珠回し)<br>輪投げ<br>ビンゴ<br>福引<br>子供用菓子<br>家庭用菓子<br>金魚すくい<br>ヨーヨーつり等 | 9:30～15:00<br>お寺(読経のみ)<br>輪投げ<br>ビンゴ<br>福引<br>子供用菓子<br>家庭用菓子等 |
| これから先 | 会長の方針で変わる可能性はあるが、このままの内容で続けていきたい | |

(2) 町内会組織と地蔵盆の運営

現在、町内には 44 軒が居住している。中学生までの子どもの数は約 10 人である。共同住宅は 1957 年に建てられたアパートと 1984 年に建てられたマンションの 2 棟であるが、いずれも町内会には加入していない。町内会組織としては 5 組にわかれている。地蔵盆の運営に関しては、全て町内会長・副会長・会計の 3 役と各組の組長 5 人が担っている。町内会長は組長の中から選挙で選出される。一度町内会長に選ばれた場合、以後 5 年間は町内会長候補から省かれる。町内会長の年齢は、平成 25 年度は 60 代、平成 24 年度は 40 代、平成 23 年度では 60 代であった。基本的には 60 代以上の年配者であり、それ以下の年齢の人が選ばれることは稀である。地蔵盆の費用に関しては、町内会費とは別で毎年地蔵盆の為に住民に寄付を募り賄っている。3 役と組長、子どもを持つ家庭からは、その他の家庭に比べて多めに寄付を貰っている。平成 25 年度では約 15 万円の寄付が集まった。地蔵の管理は、近所に倉庫を借りて、そこにテント等の他の備品と一緒に保管している。

平成10年度では住宅の数は、現在より少し少ないは41軒であったが、子どもの数は現在の2倍の約20人であった。マンションとアパートはこの頃から存在したが、現在と同じく町内会には加入していない。地蔵盆の運営に関しても、現在と変わらず各組の組長と町内会長、副会長、会計の3役が担っていた。地蔵盆の費用は現在と変わらず寄付金、地蔵の管理に関しても倉庫で保管と現在と比べて特に変化は見られなかった。

(3) 地蔵盆の内容

平成25年度の地蔵盆は8月18日、日曜日に開催された。日程については毎年8月の終わりの日曜日に行なわれるが、詳しい日程は役員が集まって決定している。

当日は、路地にテントを立てて会場としている。朝の9時半に会場に集合し、お寺の住職による10分程度の読経が行なわれる。数珠回しや法話は行なわれていない。その後は、中学生までの子どもを対象とした輪投げやビンゴ、福引き等の遊びがあり、小学生までの子どもには子ども用のお菓子、それ以外には家庭用のお菓子が配られてお昼の15時頃に終了した。それぞれのイベントはあらかじめ決めてあるプログラムの時間に合わせて行なわれる。子どもたちはそれぞれの催し物の時間を知らせる鉦を鳴らして町内をまわる係と、当日会場に飾る行燈の絵を描く係を務めている。地蔵盆の終了後には、会長や役員たちの手によって各家庭にお供えのお下がりが配られる。

子どもの遊び用に用意されたビンゴの景品に関しては、5年程前のおもちゃの残りを使いまわしている為、子どもから「景品が古い」と文句を言われるが、買い替える予定はないそうである。地蔵盆の参加者に関しては、お寺の住職による読経までは年配者がほとんどであるが、それ以降の遊びのプログラムでは子どもとその親が主な参加者となっている。西部に子どもは10人いるが、実際に参加したのは7人程度であるので、非常に少ない子どもの為に大人たちは遊びの準備をしていることになる。今後の地蔵盆に関しては、子どもが少なくなっている為、町内会長の方針で簡略化される可能性はあるが、出来る限りこのままの内容で続けていきたいということであった。

平成10年度は現在より少し長めで夕方まで行なわれていた。内容は、お寺の住職による読経があるところは同じであるが、この頃は子どもたちによる数珠回しが行なわれていた。この数珠回しは、子どもが少なくなったことで参加者がいなくなり無くなってしまったそうである。遊びに関しても、この頃はもう少し種類が多く、現在行なわれている輪投げ、ビンゴ、福引きに加えて金魚すくいやヨーヨーつりが行なわれていた。子ども用のお菓子と家庭用のお菓子、お供えのお下がりが配られる点、会場に飾られる行燈の絵を描くこと、鉦を鳴らして町内をまわる係を子どもたちが担うという点は現在と変わりがない。

## 4.3 星池町竹園部の地蔵盆

(1) 地域の概要

図 7 で示したように、竹園部は星池町の東側に位置する町内である。面積はそう広くないが、世帯数が 82 軒と他の町内に比べて圧倒的に多い。区画整理事業のエリアではないため、西部と同じく古い住宅が多い、昔ながらの町並みの町内である。

表 9　星池町竹園部の地蔵盆

| | 竹園部<br>町内会長(70代) | |
|---|---|---|
| | 平成10年 | 平成25年 |
| 日程 | 8月の終わりの日曜日。役員が集まって決める | 8月の終わりの日曜日。役員が集まって決める |
| 場所 | 道路にテントを立てる | 道路にテントを立てる |
| 運営の資金 | 地蔵盆の為に集めた寄付(約40万円) | 地蔵盆の為に集めた寄付(約30万円) |
| 地蔵の管理 | 道端に祀られている | 道端に祀られている |
| 運営する人 | 町内会の地蔵係 | 町内会の地蔵係 |
| 参加する層 | 子ども | 子ども |
| 世帯数 | 81軒 | 82軒 |
| 子どもの数 | 約50人 | 約20人 |
| 子どもの役割 | 特になし | 特になし |
| マンション | なし | |
| 町内会長 | 1組から8組へと順番に1組から1人投票で町内会長を決定する。平成25年、24年、23年全て70代年配者が町内会長を務めている。それ以前も60代以上の人が会長を務めることがほとんどで、どうしても人が見つからなかった場合はそれより若い人が会長になることもある | |
| 内容 | 9:00～夕方まで<br>お寺(法話・読経・数珠回し)<br>福引<br>ビンゴ<br>子供用菓子<br>家庭用菓子<br>輪投げ等 | 9:00～夕方まで<br>お寺(法話・読経・数珠回し)<br>福引<br>ビンゴ<br>子供用菓子<br>家庭用菓子<br>輪投げ等 |
| これから先 | 子どもの多い地域なのでこれからもずっとこの内容で続けていきたい | |

(2) 町内会組織と地蔵盆の運営

現在町内には 82 軒が居住している。星池町の 4 つの地区のなかで最も世帯の多い地区であり、中学生までの子どもの数も 22 人と他の地区と比較して多めである。マンション等の共同住宅はない。町内会組織としては 8 組に分かれている。地蔵盆の運営は他の地区と違い、「地蔵係」と呼ばれる 5 人が担っている。地蔵係及び町内会長の選出は毎年、選挙で選出している。平成 25 年、24 年、23 年全て 70 代年配者が町内会長を務めており、

それ以前も60代以上の人が会長を務めることがほとんどで、若い人が町内会長になるときはどうしても人が見つからなかった場合のみである。地蔵盆の資金は、一戸3000円、地蔵係、三役、子どものいる家庭からは5000円を集金しており平成25年度では約30万円集まっている。地蔵の管理に関しては、道端に祀られており誰でもお参りできる状態になっている。

平成10年も現在と家の数はほとんど変わらず81軒であった。子どもの数は現在でも多いが、この頃は更に多く、現在の2倍以上の約50人であった。地蔵盆の運営に関しては、現在と変わらず地蔵係の5人が担っていた。地蔵の管理に関しても、現在と変わらず路地に祀られていた。当時は子どもが多かったため寄付金は現在より少し多く、約40万円集まっていた。

(3) 地蔵盆の内容

平成25年度の地蔵盆は8月18日の日曜日に開催された。地蔵盆の日程は毎年8月の終わりの日曜日と決められているが、詳しい日程は地蔵係が話し合って決定している。地蔵盆は地蔵のある場所(路地)にテントを立てて行なわれる。当日は会場に朝の9時に集合し、お寺の住職による10分程度の読経、子どもたちによる数珠回し、子どもたちに向けた簡単な法話が行なわれる。その後、中学生までの子どもを対象にした輪投げ、ビンゴ、福引き等、子どものための遊びが行なわれる。また、子どもには子ども用のお菓子、それ以外には家庭用のお菓子と家庭用品が配られ、夕方の5時頃終了した。終了後は地蔵係によって各家庭にお供えのお下がりが各家庭に配られる。地蔵盆の主な参加者は、お寺関連のプログラムでは年配者、それ以降は子どもとなっている。

竹園部で現在行なわれている地蔵盆は、運営方法・内容共に平成10年度と比較しても全く変化がなく、長い間同じ内容で行なっているそうである。また、子どもの多い地域であるのでこれから先もこのままの内容で続けていきたいという事であった。

### 4.4 星池町南部の地蔵盆

(1) 地域の概要

図7で示したように、南部は星池町の南側に位置している。子どもの遊び場であり、年配者の憩いの場所でもある児童公園に隣接している。町内の敷地のほとんどが区画整理事業のエリアであり、一部を除いた大部分の家が新しく建て替えられた町内である。

表 10　星池町南部の地蔵盆

| | 南部<br>町内会長(60代)<br>平成10年 | 平成25年 |
|---|---|---|
| 日程 | 8月最後の日曜日 | 8月最後の日曜日 |
| 場所 | 公園 | 公園 |
| 運営の資金 | 地蔵盆の寄付 | 地蔵盆の寄付 |
| 地蔵の管理 | 道端に祀られている | 道端に祀られている |
| 運営する人 | 町内会役員 | 町内会役員 |
| 参加する層 | 子ども | 子ども |
| 世帯数 | 45軒 | 45軒 |
| 子どもの数 | 約25人 | 20人。参加したのは約10人 |
| 子どもの役割 | 特になし | 特になし |
| マンション | なし | 1棟。町内会には入っていない |
| 町内会長 | 3役の中の1人が選挙で翌年の町内会長になる。平成25年、24年、23年いずれも60代の人が会長を務めている。それ以前も60代以上の人が会長を務めることが多い | |
| 内容 | 平成入ってはらも暫くは2日間かけて行なわれていた　現在行なわれている<br>お寺・ゲーム・ハンバーガー・スイカ・おやつ・福引の他にも、1日目の夜には映画を観たりしていた | 9:00～15:00<br>お寺<br>ゲーム<br>ハンバーガー<br>スイカ<br>おやつ<br>福引き等 |
| これから先 | 町内会長の方針で変わるかもしれないが、今後もこのまま続けていきたい | |

(2) 町内会組織と地蔵盆の運営

現在町内には 45 軒が居住している。平成 14 年に室数 36 のマンションが建てられたが、町内会には加入していない。中学生までの子どもの数は約 20 人と今回調査対象とした 4 つの町内会の中で最も子どもの割合が多い地域である。町内会組織としては 4 組に分かれている。地蔵盆の運営は町内会の三役と各組の組長 4 人が担っている。町内会長は三役の中から 1 人が選挙で選出され翌年の町内会長となる。平成 25 年、24 年、23 年いずれも 60 代で、それ以前にさかのぼっても同じぐらいかそれ以上の年齢の人が町内会長を務めている。地蔵盆の資金は毎年寄付を募うことで賄っている。地蔵は児童公園の向かいの道端に祀られており、住民がいつでもお参りできるようになっている。

平成 10 年では、子どもの数は現在より少し多い 25 人程度であった。地蔵盆の運営に関しては、現在と変わらずそれぞれの組長と町内会長、副会長、会計の 3 役と組長が担って

いた。地蔵盆の費用に関しても寄付金で賄われ、地蔵の管理も道端に祀られていたということで変化はみられなかった。

(3) 地蔵盆の内容

平成25年度の地蔵盆は8月25日、日曜日に開催された。日程は大日如来の縁日である8月28日に合わせて、その前後の日曜に行われている。今回調査した4つの町内のなかでは大日如来を祀っているのは南部だけであった。当日は、南部に隣接する児童公園が会場になる。9時頃に集合して、お寺の住職による10分程度の読経、子どもたちによる数珠回し、法話が行なわれる。それが終了すると、大人たちは家に戻り、子どもと町内会の役員の大人が残る。その後は、プログラムで決められた時間ごとにスーパーボールすくい、福引き、ビンゴ等の催し物が行なわれ、スイカ、ハンバーガー、子ども用のお菓子が配布されてお昼の3時頃に終了する。終了後は会長と役員の手によってお供えのお下がりが各家庭に配られる。今後の地蔵盆に関しては、子どもの多い町内であるので、今後も変わらずこの内容で続けていきたいということであった。

子どもが多く地蔵盆の内容も充実している南部であるが、平成10年度は更に盛り沢山の内容で地蔵盆は行なわれていた。日程に関しては2日間かけて行われており、内容に関しても現在行なわれているスーパーボールすくい、福引き、ビンゴ等の遊びやスイカ、ハンバーガー、子ども用のお菓子の配布に加えてヨーヨー釣り、花火等の豊富な遊びが用意されていた。また、1日目の夜には映画の上映会が毎年の恒例であった。これらの催し物は、平成に入ってからもしばらくは残っていたが、現在では無くなってしまった。

# 第5章　調査結果の分析

4章でみたインタビューの結果をまとめ、2章で立てた2つの仮説が正しいか検証する。まず、平成10年から平成25年までの15年間の間にそれぞれの町内での地蔵盆の運営方法と内容がどのように変化したかをまとめる。

## 5.1　各地蔵盆の変化のまとめ

北部では、運営の資金は寄付金から町内会費へと変化し、地蔵の管理についても路地に祀られていたものがお寺に預けられるなど変化した部分が多かった。また、内容に関しても遊び関連の催し物が完全になくなり現在ではお寺関係のみへと簡略化されていた。子ども用のお菓子や図書カードの配布に関しても以前はプログラムで決められた時間ごとに配っていたが、現在では終了後にまとめて一気に配布し短時間で終了するなど大きく形を変えていた。

西部では、運営の方法には特に変化は見られなかった。しかし、地蔵盆の内容に関しては数珠回しがなくなり、遊び関連のプログラムに関しては金魚すくいやヨーヨー釣りがなくなるなど若干の簡略化がみられた。また、遊び用の景品のおもちゃを毎年使いまわしていて子どもから文句を言われるという話から、できる限り費用を安く抑えているような印象があった。

竹園部では、運営の方法、地蔵盆の内容ともに変化がみられず現在でも15年前と全く変わらない充実した内容で盛大に行なわれていた。

最後に、南部では運営方法に関しては特に変化がみられなかったが、日程は2日間から1日へと規模の縮小がみられた。しかし、縮小されていたとはいえ簡略化される前の北部と同じレベルの内容で、とても充実した内容の地蔵盆が現在でも行なわれていた。このように、地蔵盆が大きく簡略化されていたのは北部のみであるという意外な結果となった。

### 5.2　仮説1についての考察

地蔵盆は子どもの数の減少によって簡略化されるのではないか、という仮説1について分析する。この仮説を各町内の地蔵盆の実態に当てはめて考えてみる。

まず、今回調査した4カ所のなかでもっとも内容が簡略化されていた北部である。北部では子どもの数は平成10年度では約20人であったのに対して平成25年度では12人と約半分へと減少している。そして、平成17～20年頃に子どもの数が5～6人まで激減した時期があった。地蔵盆が現在の内容に変更されたのはちょうどこの時期である。また、その背景については数名の子どものために、子どものいない家庭から寄付金を集めづらいという町内会の役員の声があった。そこで、運営の資金を寄付金から町内会費に切り替え、町内会費で運営するにはそれまでの内容を続けるには町内会費では資金が足りず、現在の内容へと切り替えられたのである。

次に、若干の簡略化がみられたが大きな変化のなかった西部である。西部でも子どもの数は約20人から約10人へと減少していた。これは現在の北部とほぼ同じでかなり少ない人数である。この影響を受けて西部では参加する子どもがいないということで数珠回しが消滅していた。また、おもちゃを毎年使いまわしてお金を節約しているという話に関しても、北部と同じく子どもが減少して地蔵盆の寄付金が集まらないことが原因であると考えられる。しかし、子どもが減少して資金が集まらないなかでも、北部と違い西部では福引きやビンゴ、輪投げなどの遊びが用意されており、子どもからすると十分楽しめる内容が行なわれていた。

15年前と比較して全く変化の見られなかった竹園部では子どもの数は約50人から約20人へと半分以下まで減少していた。しかし、減少したとはいえ北部や西部と比較すると2倍の人数であり、地蔵盆を行なうための数としては十分であると思われる。

平成に入ってからもしばらくは2日間行なわれていたが、現在では1日間へと縮小されていた南部も、子どもの数は約25人から約20人へと15年前に比べて若干減少していた。それでも竹園部と同じく地蔵盆を行なうための人数としては十分であり、内容も充実したものとなっていた。

以上の結果から子どもが減少すると、単に子どもの参加者が少なくなるということだけでなく、少ない子どもの為に子どものいない家庭から寄付金を回収しづらくなるということ。それによって、運営のための資金が不足するとそれまでの内容を継続するのが難しくなるということがわかった。しかし、子どもの数が同じように減少していても、簡略化がみられる町内とそうでない町内が存在したことから、今回立てた仮説1のように子どもの数が少なくなったからといって必ずしも地蔵盆の内容が変わるわけではないということが明らかになった。つまり、子どもの減少は地蔵盆の簡略化に直接的に影響を与えていなかったのである。

### 5.3　仮説2についての考察

子どもの数が同じように減少していても、簡略化がみられる町内とそうでない町内が存在するのは何故か。次に、仮説2の分析を行なう。仮説2は定年を過ぎて町内会の仕事に熱心に取り組む年配者が会長を務める町内ではそれまでの内容を継続しようとするが、反対にそれより若く現役世代として普段仕事をしながら会長の仕事も務める町内では地域行事は形を変えているのではないか、という考えである。この仮説を各町内の地蔵盆に当てはめて考えてみる。

まず、子どもの数が10人程度まで減少し内容も大きく簡略化された北部である。北部の町内会長は平成25年度では50代、平成24年度でも50代、平成23年度では70代、それ以前では最も多いのは50代であり、仕事をしながら町内会長の仕事も務めている人が多いということであった。

次に北部と同じように子どもの数は10人まで減少していたが、小さな変化しか見られなかった南部である。南部の町内会長は平成25年度、平成24年度、平成23年度いずれも60代、町内会長を務めることが多いのは60代ということであった。

次に、子どもの数は15年前に比べて半分以下へと減少していたが、地蔵盆を行なうには十分の人数がおり、運営方法、内容ともに変化の見られなかった竹園部である。竹園部では、町内会長の年齢は平成25年度、平成24年度、平成23年度のいずれもが70代であり、それ以前も基本的に60代かそれ以上の年齢の人が町内会長の役を務めている。それより若い人が町内会長を務めるのはどうしても人が見つからなかったときのみであるということであった。

最後に、竹園部と同じく子どもの数は減ったものの十分の人数が暮らしている西部である。2日間から1日だけに縮小されたが盛んに地蔵盆を行なっていた西部の町内会長は平

成25年度では60代、平成24年度では40代、平成23年度では60代であり、基本的に町内会長を務めることが多いのは60代以上であった。

インタビューの結果から、地蔵盆が大きく簡略化されていたのは北部のみであることが既にわかっている。そして、多くの町内会で60代以上の人間が町内会長を務めているなか、50代以下の現役世代が町内会長を務める傾向にあったのもまた北部のみであった。60代以上の年配者が会長を務める傾向にある西部では、北部と同じように子どもの数は10人程度まで減少していたにも関わらず地蔵盆の簡略化はほとんどみられなかった。

仮説1についての考察から、地蔵盆の資金が不足するとそれまでの内容を継続することが難しくなるということがわかっているが、これにも会長の年齢が影響していると考えられる。年配者が会長の場合、毎年の恒例ということで住民たちから寄付金を回収することは容易いが、若年者が会長の場合、自分よりも年配者たちの家を回って寄付金を集めるのは難しくなるからである。

このことから、50代以下の若い世代は60代以上の年配者の世代に比べて町内会への関心が強くないというだけでなく、自分より年上の世代に寄付金を頼みづらいという点でも地蔵盆の簡略化に影響を与えていることが明らかになった。つまり、「50代以下の若い人間が会長を務める町内では地蔵盆は簡略化される」という仮説2は正しかったということになる。

## おわりに

本稿では、星池町北部の地蔵盆の内容が簡略化された原因について2つの仮説を立て、中京区星池町の4カ所で開催された地蔵盆の実態を調査、比較することで地蔵盆の内容が簡略化される原因について分析してきた。その結果、①子どもが少なくなると運営のための寄付金が集まりにくくなりそれまでと同じような内容で続けることが難しくなること。そして、②そのような状況になったときでも、定年を過ぎて町内会の仕事に熱心に取り組む年配者が会長を務める町内ではそれまでの内容を継続しようとするが、反対に普段仕事をしながら会長の仕事も担う町内では、地蔵盆は大きく形を変えているということが明らかになった。そして、4カ所中ここ15年間で大きく形を変えていた町内が北部の1カ所のみであったことが意外な結果として明らかになった。

しかし、今回の調査の結果は、あくまで4つの町内会という限られた地域の分析にもとづいたものである。さらに多くの町内会の地蔵盆を比較することが出来れば、より深い分析ができると考えられる。また、今回の調査で「会長の年齢が若い町内では地蔵盆が簡略化されやすい」という仮説をたてたが、調査した4つの町内会のうち、若い人間が会長を務める傾向にある町内会は1カ所のみであったため、そういった町内会でのインタビュー

をもっと行なうことが出来ればより説得力のある考察が得られたと考えている。そのため、今後は更に広い範囲での地蔵盆を調査し、検証することが今後の課題である。

第１章で述べたように、地蔵盆という行事はただの子どものお祭りではなく地域の連帯感を強化する場であり、男女共同参画実現の場としても大きな役割を果たしている。地域のつながりの希薄化が問題視されるなかでも京都のまちがいくぶんの暖かさを保ち続けているのは、地蔵盆のような地域行事を大切にしてきたからではないだろうか。子どものための行事ということにとらわれず、時代の変化に合わせて柔軟に形を変えながら、いつまでも続いてほしい。

## ［参考文献・参考 URL］


鯵坂学・小松秀雄, 2008,『京都の「まち」の社会学』世界思想社

文化庁, 1969,『日本民俗地図』国土地理協会

学研辞典編集部, 2004,『年中行事・記念日事典』学研

服部比呂美, 2010,『子ども集団と民俗社会』岩田書院

伏見のまちづくりをかんがえる研究会　子どもの生活空間研究グループ, 1987,『子育ての町・伏見』都市文化社

石川純一郎, 1995,『地蔵の世界』時事通信社

「角川日本地名大辞典」編纂委員会, 1982,『角川日本地名大辞典　京都府』角川書店

金沢市・金沢大学文学部社会学研究室, 2007,『市民のコミュニティに関する意識・行動調査』金沢市ホームページ
(http://www4.city.kanazawa.lg.jp/kurashi/index.html/. 2013.12.17).

子どもの文化研究所, 2000,『子どもの文化』財団法人　文民教育協会

幸田町, 2012,『住民意識調査報告書』幸田町ホームページ
(http://www.town.kota.lg.jp/. 2014.12.17).

京都市, 2012,『京都市・自治会・町内会アンケート報告書』京都市情報館
(http://www.city.kyoto.lg.jp/. 2013.12.7).

京都市中京区役所
(http://www.city.kyoto.lg.jp/nakagyo/, 2013.12.7).

前田昌弘・森重幸子, 2012,「地蔵盆の運営実態と地域のレジリエンス向上に果たす役割に関する研究」

真下美弥子・真下厚・深澤光佐子, 2012,「四地域を通して考える地蔵盆～世代間の伝承と地域コミュニティの機能～」

森谷尅久,中田昭,2000,『京都の祭り暦』小学館

内閣府,2007「国民生活白書」内閣府ホームページ
(http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper//,2013.12.7)
内閣府大臣官房政府広報室,2011,「社会意識に関する世論調査」,内閣府
西村信治・室崎生子・森靖夫,1986,「地蔵盆を通してみた地域の子供の発達保障の空間づくりに関する研究」『日本建築学会近畿支部研究報告』(26)509-512
野口美智子,1983,「近隣空間の研究(4)京都<桃薗><竹間><山階南>学区における地蔵盆に対する住民意識」『日本建築学会近畿支部研究報告集　計画系 (27)』493-496　社団法人日本建築学会
大口信也・藍澤宏・菅原麻衣子,2007,「地域社会における行事の果たす役割とその継承要件に関する研究」『学術講演梗概集. E-2, 建築計画 II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育』221-222 社団法人日本建築学会
島田崇志,2012,『切り絵・細密画で楽しむ京のまつり・年中行事』京のまつり研究会
「地蔵盆は男女共同参画実現の好例」『京都新聞』2004.11.17
総務省統計局
(http://www.stat.go.jp/index.htm,2013.12.9).
滝沢ひろみ・福野奈都子・井上えり子,2008,「地蔵盆空間の研究」『学術講演梗概集 E-2, 建築計画(2),　住居・住宅地, 農村計画,教育』311-312 日本建築学会
谷川健一,1979,『日本庶民生活史料集成　第 22 巻』三一書房
谷川健一,1981,『日本庶民生活史料集成　第 23 巻』三一書房
テクノコ,2013,都道府県コード 26,近畿地方京都府,市区町村白地図イラスト,無料白地図,( http://technocco.jp/n_map/0260kyoto/kyoto2_aam.png,2013.12.15).
上野智史,2005,「上福田の地蔵盆」『金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書』20:71-78
山折 哲雄,1998,『日本民俗宗教辞典』東京堂出版